

関係各位

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：J A 福岡中央会 担い手・営農サポートセンター)
(公 印 省 略)

営農情報 12

長雨・日照不足に伴う技術対策について

8 月以降、降雨が多く、今後も長雨・日照不足が予想されています。下記の事項を参考に、技術対策の実施をお願いします。

留意事項

ほ場・農業用施設の見回りは、気象情報を十分に確認し、大雨がおさまるまでは行わないで下さい。また、大雨等がおさまった後の見回りにおいても、増水した水路など危険な場所には近づかず、人命を最優先に事故防止の徹底に努めてください。

1 水 稲

【早期水稲】

- 成熟期に達した水稲は、穂発芽の発生が懸念されるため、収穫可能になり次第、収穫を行う。
- 倒伏した稲は、発芽しやすいため、直ぐに落水する。
- 収穫した籾は素早く適切に乾燥する。
- 乾燥調製施設は、倒伏等により高水分籾の荷受けが予想されるため、乾燥時間が長くなることを想定して、集荷体制を整える。
- 穂発芽が多発した場合は、収穫前に J A 及び農業共済組合と協議し、対応を決定する。

【普通期水稲】

- 冠水したほ場は、早急に排水を図り、冠水時間を短くする。排水後は、できるだけ新しい酸素を含んだ用水との入れ替えを実施する。
- 長雨により湛水状態が続いたほ場が多いことが予想されるため、間断かん水を励行して、根に酸素を供給することで健全化を図る。
- 葉いもちの発生しているほ場は、出穂直前と穂ぞろい期の防除を徹底する。また、穂いもちは、出穂後 3 週間まで感染し被害が大きくなるため、防除を徹底する。
- 無人ヘリ防除などは、長雨により散布計画が大幅に狂うため、薬剤散布後の病害虫の発生状況に注意し、必ず確認する。
- 液剤や粉剤防除が難しい場合は、パック剤や豆つぶ剤などの使用も検討する。

(裏面につづく)

2 大豆

- 湿害防止のため、本暗きよの栓を開けて地下排水を図る。また、中耕・培土でできた溝と排水口を確実に繋いで、早めに地表水の排水を行う。
- 強い雨や浸水・冠水により畦が崩壊し、停滞水の排出が困難な場合は、土壌が固まる程度になったら乗用管理機等でうね間を走行するなど、早めに根圏に酸素を供給する方法を講じる。
- 今後も雨が多いと予想されるため、うね溝の整備を行い、排水対策の徹底を図る。
- 中耕・培土は、開花前までに行い、開花後には実施しない。
- 雑草の多発も懸念されるため、開花前までに中期除草剤の散布を行う。
また、アサガオ類などの難防除雑草が多発する場合は、うね間処理も検討する
- 開花期前で生育量が少なく、葉の黄化がみられる場合は、窒素成分で2 kg/10a（硫安 10 kg/10a）の速効性肥料を追肥し、生育を回復させる。
- 紫斑病は、開花後3～5週間に1～2回、カメムシ類と同時防除を行う。

(参考)

大豆の平年の開花期：7月10日播き 8月19日頃
7月24日播き 8月31日頃

※薬剤防除にあたっては、周辺作物への飛散防止に努めるとともに、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を確認し、適切な散布を実施しましょう。